

今井卓爾著『明治詩歌書影手帖』

石 丸 久

今井先生が早稲田大学の教職を停年で辞されるにあたり、記念に上梓なされたご労作のまとまりがこの一書である。

「ななそちのよはひかさねしなくさみの

いとなみのをここにささくる」

の玉詠を添えて、私も一本を辱うし、多大の興味と深甚の感銘をもって拝読させていただいた。

内容は、著者おん自らが命名されたとおりであり、いささかの銜いも誇張もない。蓋し、先生の篤実なお人柄によるものと拝察する。

「目錄」には、まずまえがきが述べられ、つづいて「図会」「随稿」「備忘」「名寄」とあって、あとがきが据えられている。

行文のすべてにわたって、いかにも古典文学者のものなされた叙述らしく、語彙のおくゆかしさには、時として微笑を禁ずることのできぬものが少なくない。この「名寄」など、まさにその一例であり、世の常ならば「インデックス」と鑑行の語を使ったり、「索引」と四角な文字を用いたりするところであろう。そうしたありきたりの言葉を使用する気もちにはなれなかったであろう著者の、もろもろのうたのまきまきに対する深い愛執が、そこに

感じられよう。

一七〇ページに及ぶ図会―書影写真―の次には「随稿」がおよそ一〇〇ページに垂んとしている。その内訳を列挙すると―「和装本の詩歌書」「初期個人の詩歌書」「新体物と唱歌物」「藤村と晩翠」「鉄幹と晶子」「共著と編者」「詩・歌散文の書」「泣菫と有明」「文庫派の人たち」「叙事物と思想物」「地方版の詩歌書」「白秋と露風」「芸術派と民衆派」「翻訳の詩書」「詩歌書の書名」「詩歌書の判型」「詩歌書の装幀」「詩歌書の外装」「詩書と歌書」「明治から大正へ」となっている。

稀覯本を渉獵し蒐集することまさに四十年に垂んとする私としては、読み来たり読み去り、まことに応接に遑なく、巻を措く能わざる快き興奮を味わせていただいた。

「傍観者として、われ面白の物見、物聞などをしてる間にも、いろいろ教えられ、考えさせられることも又あった。近代文学の中味については知るところはないけれども、おろおろの貧しい知得だけからするならば、古典文学と近代文学との間には区別をつけすぎるようにも思われる。」と「まえがき」に言われる著者の言葉は、なおつづく――「知らないほど強いことはないから言えるのかもしれないが、文学という立場から見えてゆくかぎりにおいては、作品にしても、作家にしても、どうして古典文学と近代文学との間にあるあからさまな区切をつけなければならぬのか、どうしても得心がゆきかねる。書影ひとつ取りあげてみても、これら両文学の間に特徴的区別をつけることが困難であり、時には無意味でさえあるようにも思われる。区別するのが当然であり、

区別することを前提にして考えるというようなことは、どうも本末顛倒のように考えられ、両文学はむしろ一貫して考えるべきものであるように思われるのである。あれこれ見たり聞いたりしているうちに、現物を見ないで何かをいう恐ろしさを痛感したこともしばしばであった。」と。

遜って自らを抑えつつ述べられたこの一節こそ「まえがき」の——ひいては全巻の庄巻と拝察して大過あるまい。

頂門の一針である。さればこそ、王朝の日記・物語の權威として周知されておられる著者が、明治大正の近代文学の一角に對して発言されざるをえなかったのであろう。言々々々詢に肯綮に中ると申さねばならぬ。

今は——戦後は——おぞましき世になり下った。一応好きなような気がして文学に向かう、外国語は苦手でと国文科に行き、古典はむづかしいからと近代文学に逃げる若者が少なくない。そういう若者たちの卒業論文を読まされて三十年、私の恒に惟うのは、情けないの一語に尽きる。しかもそういった手合いが、も早や教職についているのだから何をか言わんや。少なくとも英独仏が読め、古典のわかることが近代文学研究の必須な基本であるのに。

一人の人の身体を完全に検診するには十指に幾倍かする国手を探わさねばならぬという。こと、文学研究においては、いわゆる科学の分化的発達とは別で、余り進歩も発達も總体的にはしていないのではあるまいか。たしかに、出藍の誉ということがこの世界では絶えてみられなくなり果てたのではあるまいか。先人恩師の部分部分を後進弟子が辛うじて継承してお茶をにごしているの

ではあるまいか。自己批判も含めて、寒心に耐へぬところではある。

さて、そうした後身の研究態度に「得心がゆきかねる」と思われ、「本末顛倒」とさえ考えられつつ学園を去られた一先人今井先生のこの度のご労作に對い、通読教次、多少気になるところを率直に言わせていただくと、無論、著者ご自身が「詩歌書影手帖」と題されたこの書に、親しく現物をご覧になつての印象——「書影」というもの——を快く自由に語っておられるのであって、とりわけこちたき調べごとや究めごとを論われたわけではない由であるが、それにしても、おのおのの詩歌書の内容とその書影との間の関わりあい——あるいはその必然性に——しばしば拘らわれすぎておられはしまいかということである。

恩師本間久雄先生から明治文学のご講義を譲られ継承しておよそ三十年、私も資料の博搜に執掌するの間、多くの詩人や歌人、また物故した詩歌人の近親者と縁りを得て、この種の問題についても、さまざまに質し、いろいろとお応えいただいたことも二三にとどまらない。

もちろん、詩歌人自身の好みからして、自らの集に自ら装幀したり挿画をものしたりした例も枚挙に遑ないが、また、意中の友にそれを依頼したりしたものもまた歴数に堪えないが、時を溯るほど、作者の意向よりも出版書肆の意図が支配的となり、結果的には恣意的になることが少なからずあったという。

とりわけ、「随稿」の中の「叙事物」と思想物の条下に、「花外は真骨頂の社会主義者であったかどうか、詩書影からは疑問の余

地もあるとしたところを初め、堺利彦の「社会主義の詩」の装釘と装幀に触れたところなどに一種のこだわりが感じられる。

その他、気づいたことども――

○「新体詩抄」の第二編以下未刊はたしかであるが、意欲的には外山正一・中村秋香・上田万年・坂正臣らの「新体詩歌集」がそれに当たろうし、再版「新体詩鈔」で装幀が唐本風に逆行したのは却って新味を逐ったものではなからうか。

○美妙の「少年姿」は、「名寄」で「し」の項に入っているが、「わかしゆすがた」と訓むのは「我楽多文庫」初出で明らかである。○「カタッデ」四冊とあるが、事実上は三冊ではないか。とくに小生の秘蔵する処。

○「邪宗門」初版の箱につき、「本体とかけはなれたものである。」と言われるが、私は未見であるから、一応参考になり感謝申しあする。

○露風の「廢園」の色につき「赤または暗緑で」「赤表紙の方が多いようであるから、あるいはそのあたりに著者の思惑のなにかがありそうにも考えられる。」とあるが、私が曾て、関係者から聞いた所では、製本屋の手持材料の都合にすぎないという。私蔵げるこの書の箱は素朴なものである。

○「衣香扇影」は「美人詞林」と角書して美妙が巾幗者流の古い詩歌文藻を編んだもの。

○露伴の編「はつしほ」、晶子の編「黒髪」のような個人的な編み物に言及されてもよかったと思う。

○初出誌との関連も「書影」に関わっていて一興を覚えることが

少なくない。晶子の「みだれ髪」は、その出版に方り、母胎たる「明星」では再三「詩集」と呼称しているのであった。

(昭54・3 早大出版部刊 A5判 四四二頁 一八〇〇〇円)

### 新刊紹介

杉本つとむ著

### 『辞典・事典の世界』

筆者の〈日本語講座〉の第三冊として、辞典・事典に関する論考五編をまとめたもの。巻頭に、江戸時代までの辞典・事典の歴史を通観した一章を置いて辞書史への緒言とし、以下、各論として、『<sup>早大</sup>節用集』『増補下学集』『選言便蒙抄』『訓蒙図彙』が取り上げられている。

わが国の辞書の通史はまだ記述されておらず、個別的な辞典の検討に終わっているのが現状だが、今後、辞書史を描いて行こうとする上で最も必要とされるところと思われる全体的な展望が示されているという点で、巻頭の一編は参考とすべきものであろう。

第二編以下で取り上げられている辞典は、いずれも室町時代から江戸時代前期にかけてのもので、近世語研究資料としての再評価という意味がこめられている。四編とも、影印の刊行(すべて索引を伴う)にあたって執筆された研究・解説にもとづいており、その記述は、一面では形式に対する厳密な配慮を見せると同時に、辞典全体に対する総合的な評価をもあわせ示すという姿勢が保持されている。

(杉本つとむ 昭54・6 桜楓社 A5判)  
(日本語講座3)